

西廂記、還魂記と紅樓夢をめぐる夢の發展

——現實の中の夢から夢の中の現實へ——

竹村則行

一般に、子供は常に親から生れて大きくなる様に、どのような文學作品も、決してある日突然に單獨に出現することは無く、その手本となつた所謂親作品が必ず存在する。ここに言う親作品とは、その作品の成立に些かでも影響を與えたあらゆる先行作品を含む謂である。

紅樓夢の場合、中國の清朝に出現した、詩・賦・詞・曲をもその中に包含する総合的な小説であるところから、その成立に多少とも影響を與えたと思われる先行作品は、各時代、各ジャンルにわたつて甚だ多い。その中で、紅樓夢の措辭や構想、主題等に限定して考えると、紅樓夢に際立つて大きな影響を與えた先行作品として、元の王實甫の西廂記と明の湯顯祖の還魂記を擧げることができる。

この西廂記、還魂記、紅樓夢の三者の相互關係については、從來既にしばしば論じられて來た。例えば、王希廉は「紅樓夢總評」において、

從來傳奇小説、多託言於夢。如西廂之草橋驚夢、水滸之英雄惡夢、則一夢而止、全部俱歸夢境。還魂之因夢而死、死而復生、紫

西廂記、還魂記と紅樓夢をめぐる夢の發展

釵彷彿似之、而情事迥別。南柯・邯鄲、功名事業、俱在夢中、各有不同、各有妙處。紅樓夢也是說夢、而立意作法、另開生面。と述べ、從來の傳奇小説の言を夢に託した例として、西廂記、還魂記と共に紅樓夢をあげており、中でも紅樓夢は特に夢の立意作法において新生面を開くとしている。

また、鄭師靖の『續紅樓夢』序には、

紅樓夢爲記恨書、與西廂記等。顧讀者不附楨、張酸鼻、一而成爲寶、黛拊心者、續與未續之分也。

とあり、恨を記した書として、紅樓夢を西廂記と比較する。

更に、夢夢先生の『紅樓圓夢』楔子には、

眞個筆補造化天無功、不特現在的復夢、續夢、後夢、重夢都趕不上、就是玉茗堂四夢以及關漢卿草橋驚夢也遜一籌。

とある。これは、紅樓夢續作の一である紅樓圓夢の楔子において、還魂記、西廂記を引合いに出して自作を吹聴するものである。

次に、諸聯の『紅樓評夢』では、

自古言情者、無過西廂。然西廂只兩人事、組織歡愁、摘詞易工。若石頭記、則人甚多、事甚雜、乃以家常之說話、抒各種之性情、

俾雅俗共賞、較西廂爲更勝。

と述べ、西廂記の情と紅樓夢の情のあり方について優劣を比較する。

また、劉鶚の『老殘遊記』自序には、

王實甫寄哭泣於西廂記、曹雪芹寄哭泣於紅樓夢。

とあり、王實甫の西廂記と曹雪芹の紅樓夢とを並びあげる。

最後に、蔡元培の『石頭記索隱』となる、

第二十三回回目西廂記牡丹亭對舉、四十回黛玉應酒令、並引二

書。五十一回寶琴編懷古詩、末二首亦本此二書。所以代表當時違礙之書也。西廂終於一夢、以代表明季之記載、牡丹亭述麗娘還魂、以代表主張光復明室諸書。

とあり、紅樓夢において西廂記や牡丹亭還魂記に據った箇所を逐一擧げる。

『石頭記索隱』は紅樓夢を「清康熙朝の政治小説」として見たものだが、西廂記と還魂記に特に言及している點が注目される。

以上の數例にとどまらず、西廂記、還魂記、紅樓夢をめぐるは、從來しばしば各方面から論じられて來た。

二

そして、今これを紅樓夢の實際の表現について具體的に檢索してみると、果して以下のように、紅樓夢において西廂記、還魂記に直接言及し、或いは依據したと思われる數多くの表現例を檢證することができらる。

- ①紅樓夢第五回：秦氏笑道：『我這屋子、大約連神仙也可以住得了。』說着、親自展開了西子浣過的紗衾、移了紅娘抱過的鴛枕。
- 。西廂記第四本第一折：〔紅（娘）云〕你接了衾枕者、小姐入來也。

- ②紅樓夢第五回：壁上亦有一副對聯、書云：『幽微靈秀地、無可奈何天。』……〔第一支紅樓夢引子〕趁着這奈何天、傷懷日、寂寥時、試遣愚衷。
- 。還魂記第十齣驚夢：〔皂羅袍〕良辰美景奈何天、賞心樂事誰家院。

- ③紅樓夢第十一回：鳳姐兒立起身來答應了一聲、方接過了戲單、從頭一看、點了一齣『還魂』、一齣『彈詞』。

- ④紅樓夢第十一回：鳳姐兒低了半日頭、說道：『這實在無法了！你也該將一應的後事用的東西給他料理料理、冲一冲也好。』

- 。（紅樓夢第九回：我昨日叫賴升媳婦出去叫人給寶玉算算命、這先生算得好靈、說要娶了金命的人幫扶他、必要冲冲喜纔好。……況且寶玉病着也不可教他成親、不過是冲冲喜。』

- 。還魂記第十八齣診崇：〔貼〕老夫人替小姐冲喜。（且）信他冲的個甚喜？

- ⑤紅樓夢第十二回：他二十來歲人、尙未娶親、邇來想着鳳姐、未免有那『指頭兒告了消乏』等事。

- 。西廂記第三本第三折：只你那來被兒時嘗鬻發、指頭兒告了消乏。

- ⑥紅樓夢第十六回：寶玉心中品度黛玉、越發出落的超逸了。
- 。紅樓夢第七二回：近年大了、彼此又出落得品貌風流。

- 。紅樓夢第七九回：誰知這姑娘、出落得花朵似的了。
- 。西廂記第四本第二折：比你舊時肥瘦、出落得精神、別樣的風流。

- 。還魂記第三齣訓女：嬌養他掌上明珠、出落的人中美女。
- 。還魂記第十齣驚夢：你道翠生生出落的裙衫兒茜、豔晶晶花簪八寶瑣。

。還魂記第二九齣旁疑：玉冠兒斜挿笑生香，出落的十分情況。

⑦紅樓夢第十七、十八回：過了茶廳架，再入木香棚，越牡丹亭、度芍藥園。

。還魂記第十齣驚夢：將奴摟抱去牡丹亭畔，芍藥園邊，共成雲雨之歡。

。還魂記第十二齣尋夢：這一答似牡丹亭畔。嵌雕闌芍藥芽兒淺。：牡丹亭、芍藥園、怎生這般淒涼冷落、杳無人跡？

。還魂記第二七齣魂遊：轉過牡丹亭、芍藥園、都荒廢盡。

⑧紅樓夢第十七、十八回：少時、太監出來，只點了四齣戲、第一齣『豪宴』、第二齣『乞巧』、第三齣『仙緣』、第四齣『離魂』。……賈

薈忙答應了、因命齡官作『遊園』、『驚夢』二齣。

※俞平伯輯『脂硯齋紅樓夢輯評』に有正本を引いて「牡丹亭中伏黨玉死」とある。また、牡丹亭還魂記は、第二十齣鬧場において杜麗娘が夭折し（離魂）、第九齣離魂において靜かな庭園に遊び（遊園）第十齣驚夢において柳夢梅と契る（驚夢）。

⑨紅樓夢十九回回目：情切切良宵花解語、意綿綿靜日玉生香。

。西廂記第一本第二折：嬌羞花解語、溫柔玉有香。

⑩紅樓夢第二三回回目：西廂記妙詞通戲語、牡丹亭豔曲警芳心。

。西廂記第一本第三折：羅袂生寒、芳心自警。

⑪紅樓夢第二三回：那一日正當三月中流、早飯後、寶玉攜了一套『會員記』、走到沁芳閣橋邊桃花底下一塊石上坐着。展開『會員記』、從頭細玩。正看到『落紅成陣』、只見一陣風過、把樹上桃花吹下一大半來、落的滿身滿書滿地皆是。……黛玉把花具且都放下、接書來瞧。從頭看去、越看越愛。不頓飯工夫、將十六齣俱已看完、自覺詞藻警人、餘香滿口。雖看完了書、卻只管出神、心內還

西廂記、還魂記と紅樓夢をめぐる夢の發展

默默記詞。……寶玉笑道：『我就是個「多愁多病身」、你就是那

「傾國傾城貌」。……（林黛玉）一面笑道：『一般也嚇的這個調兒、還只管胡說。「吓、原來苗兒不秀、是個銀樣蠟槍頭。」』寶玉聽了、笑道：『你這個呢！我也告訴去。』……偶然兩句只吹到耳內、

明明白白、一字不落、唱道是：『原來姍姍紅開遍、似這般都付與斷井頽垣。』……又聽唱道是：『良辰美景奈何天、賞心樂事誰家院。』……再側耳時、只聽唱道：『則為你如花美眷、似水流年。』

林黛玉聽了這兩句、不覺心動神搖。又聽道：『你在幽閨自憐』等句、……便一翻身坐在一塊山石上、細嚼『如花美眷、似水流年』八個字的滋味。……又兼方纔所見西廂記中『花落水流紅、閒愁萬種』之句、都一時想起來、湊聚在一處。

。西廂記第二本第一折：〔混江龍〕落紅成陣、風飄萬點正愁人。

。西廂記第一本第四折：〔雁兒落〕小子多愁多病身、怎當他傾國傾城貌。

。西廂記第四本第二折：〔小桃紅〕你原來「苗而不秀」、吓、你是個銀樣蠟槍頭。

。西廂記第一本楔子：〔么篇〕花落水流紅、閒愁萬種、無語怨東風。

。西廂記第二本第四折：〔越調〕〔鬪鶻鴉〕離恨千端、閒愁萬種。

。還魂記第十齣驚夢：〔皂羅袍〕原來姍姍紅開遍、似這般都付與斷井頽垣。良辰美景奈何天、賞心樂事誰家院。……〔山桃紅〕則為你如花美眷、似水流年。是答兒問尋遍、在幽閨自憐。

⑫紅樓夢第二三回：秋夜即事……抱衾婢至舒金鳳、倚檻人歸落翠花。

。西廂記第四本第一折：〔紅云〕你接了衾枕者、小姐入來也。

(元稹、鶯鶯傳)驚駭而起，則紅娘、歛衾、攜枕而至。

⑬紅樓夢第二六回：寶玉……耳內忽聽得細細的長歎了一聲道：『每日家情思睡昏昏。』……寶玉在窗外笑道：『爲甚麼「每日家情思睡昏昏」？』……寶玉笑道：『好丫頭。』若共你多情小姐同鴛鴦，怎捨得登被鋪床。』

西廂記第二本第一折：〔油葫蘆〕我欲待登臨又不快，閒行又悶。每日，價情思睡昏昏。

西廂記第一本第二折：〔爰篇〕若共他多情的小姐同鴛鴦，怎捨得他疊被鋪床。

⑭紅樓夢第三五回：一進院門，只見滿地下竹影參差，苔痕濃淡，不覺又想起西廂記中所云：『幽僻處可有人行，點蒼苔白露冷冷』二句來。因暗暗的歎道：『雙文、雙文（引者注，崔鶯鶯，字は雙文）誠爲命薄人矣。然你雖命薄，尙有孀母弱弟。今日林黛玉之命薄，一併連孀母弱弟俱無。古人云：「佳人命薄」。然我又非佳人，何命薄勝於雙文哉！』

西廂記第二本第二折：〔脫布衫〕幽僻處可有人行，點蒼苔白露冷冷。

西廂記第一本第三折：〔東原樂〕他無緣，小生薄命。

西廂記第二本第三折：〔江兒水〕佳人自來多命薄，秀才們從來儒。

西廂記第二本第二折：〔朝天子〕才子多情，佳人薄倖。

⑮紅樓夢第三六回：一日，寶玉因各處遊的煩膩，便想起牡丹亭曲來，自己看了兩遍，猶不愜懷。……又陪笑央他起來唱『曼晴絲』一套。

（牡丹亭）還魂記第十齣驚夢：〔步步嬌〕曼晴絲吹來閉庭院，搖漾

春如線。

⑯紅樓夢第四十回：黛玉道：『良辰美景，奈何天。』寶釵聽了，回頭看着他。黛玉只顧怕罰，也不理論。……黛玉道：『紗窗也沒有紅娘報。』

還魂記第十齣驚夢：〔皂羅袍〕良辰美景，奈何天，賞心樂事誰家院。

西廂記第一本第四折：〔駐馬聽〕侯門不許老僧敲，紗窗外定有紅娘報。

⑰紅樓夢第四二回：寶釵笑道：『……昨兒行酒令兒，你說的是什麼？我竟不知那裏來的。』黛玉一想，方想起來昨兒失於檢點，把『牡丹亭』『西廂記』說了兩句，不覺紅了臉。……（寶釵道）『……弟兄們也有愛詩的，也有愛詞的，諸如這『西廂』『琵琶』以及『元人百種』，無所不有。』

⑱紅樓夢第四九回：寶玉便我了黛玉來，笑道：『我雖看了『西廂記』，也曾有明白的，幾回說了取笑，你還會惱過。這如今想來，竟有一句不解，我念出來，你講講我聽。』黛玉聽了，便知有文章，因笑道：『你念出我聽聽。』寶玉笑道：『那『鬧簡』上有一句說得最好：「是幾時孟光接了梁鴻案？」這句最妙。』孟光接了梁鴻案，這五個字，不過是現成的典，難爲他道「是幾時」三個虛字問的有趣。——是幾時接了？你說說我聽聽。』黛玉聽了，禁不住也笑起來，因笑道：『這原問的好。他（引者注：紅娘也問的好，你也問的好。』寶玉方知緣故。因笑道：『我說呢，正納悶「是幾時孟光接了梁鴻案」，原來是從「小孩兒家，口沒遮攔」上就接了案了。』西廂記第三本第二折：〔三煞〕他人行別樣的親，俺根前取來看，更做道孟光接了梁鴻案。

。西廂記第三本第二折：〔脫布衫〕小孩兒、家口沒遮欄、一味的將言語摧殘。

⑩紅樓夢第五一回：話說衆人聞得寶琴將素昔所經過各省內的古蹟爲題、作了十首懷古絕句、……

蒲東寺懷古 其九

小紅骨賤最身輕 私掖偷攜強撮成

雖被夫人時弔起 已經勾引彼同行

梅花觀懷古 其十

不在梅邊在柳邊 個中誰拾畫嬋娟

團圓荷憶春香到 一別西風又一年

衆人看了、都稱奇妙。寶釵先說道：『前八首都是史鑑上有據的。後二首卻無考、我們也不大懂得、不如另作兩首爲是。……』李紈又道：『……況且又並不是看了「西廂記」「牡丹亭」的詞曲、怕看了邪書。

。還魂記第二十齣鬧場：起座梅花庵觀、安置小女神位。

。還魂記第十四齣寫真：他年得傍蟾宮客、不在梅邊在柳邊。

。還魂記第二三齣冥判：他年若傍蟾宮客、不是梅邊是柳邊。

。還魂記第二六齣玩真：他年得傍蟾宮客、不在梅邊在柳邊。……何言不在梅邊在柳邊？

。還魂記第二八齣幽媾：他年得傍蟾宮客、不是梅邊是柳邊。……他年若傍蟾宮客、不是梅邊是柳邊。

。還魂記第三九齣如杭：因何詩句上、不是梅邊是柳邊、就指定了小生姓名？

。還魂記第二四齣拾畫

⑪紅樓夢第五四回：『叫芳官唱一齣「尋夢」、只提琴合簫管、笙笛

西廂記、還魂記と紅樓夢をめぐる夢の發展

一概不用。』……又道、『叫葵官唱一齣「惠明下書」、也不用抹臉。……』文官等聽了出來、忙去扮演上臺。先是「尋夢」、次是「下書」、衆人都鴉雀無聞。……偏有一個彈琴的湊了來、即如西廂記的「聽琴」、玉簫記的「琴挑」、續琵琶記當「胡茄十八拍」、竟成了真的了。

。還魂記第十齣尋夢

。西廂記第二本楔子：〔末云〕小子有一故人、姓杜、名確、號爲白馬將軍、……一封書去、此人必來救我。……〔潔云〕俺這裏有一個徒弟、喚作惠明、……須將言語激着他、他便去。

。西廂記第二本：崔鶯鶯夜聽琴雜劇

⑫紅樓夢第五八回：麝月笑道：『把一個鶯鶯小姐、反弄成拷打紅娘了。』

。西廂記第四本第二折：〔夫人云〕你故自口強哩。若實說呵、饒你：若不實說呵、我直打死你這个賤人？……〔打科〕〔紅云〕夫人休閃了手、且息怒停嗔、聽紅娘說。

⑬紅樓夢第六二回：這個又說『我有牡丹亭上的牡丹花』、那個又說『我有琵琶記裏的枇杷果』。

以上の諸例から、紅樓夢には、明らかに西廂記や還魂記の表現を意識したり、そのまま襲用したりする表現が際立って多いことが裏付けられる。

三

さて、この互いに關連の深い三大名著は、いずれも作品中に描かれる夢が重要な役割を占め、而も共に所謂情のテーマを追求する。即ち、西廂記は、第四本第四折、鶯鶯を蒲救寺の旅宿に残して科擧に赴

く途中の張君瑞が、鶯鶯を夢見る場面で幕切れとなる。還魂記は、第十齣驚夢、夢の中で柳夢梅と契った杜麗娘の故事を中心に物語が展開する。更に、紅樓夢に至っては、第五回、賈寶玉が夢で仙境に遊び、警幻仙姑から紅樓夢のからくりを知らされるのを始め、作者の眞實の言は多く夢の世界を假りて語られる。そして、これら三作品が、張君瑞と崔鶯鶯の、柳夢梅と杜麗娘の、あるいは賈寶玉と林黛玉との情愛を中心テーマとして描くものであることは言うまでもない。

一體、夢や情は、古今東西を問わず、文學作品によく用いられる素材であり、これらを扱った作品は夥しい數にのぼる。しかしながら、以上に見た様に、紅樓夢の描寫に西廂記や還魂記の影響が顯著であることを考えると、これら三者に、夢や情をめぐって或る系統立った關係を探ってみることは、必ずしも意味の無いことではないであろう。あるいは、紅樓夢における夢や情の設定について、先行作品におけるそれと比較して、何か独自の斬新な發想が見られるのではあるまいか。

従來、文學作品に現れた夢については、様々な角度から論じられて來た。本論では、その一つの試みとして、夢を作品中の現實と對比して把え、作品中において夢が現實とどのように關わっているか考えてみたい。更には、夢の現實への効用、夢の構想の發展という觀點も採り入れ、西廂記、還魂記、紅樓夢をめぐる夢の描寫について、でき得る限りの考察を加えてみたいと思う。

四

まず、王實甫の西廂記では、その第四本第四折、數々の苦難を経て後、遂に鶯鶯と結ばれた張君瑞が、鶯鶯を蒲救寺に残して都に受験に

赴く。その途中、草橋の旅宿で、自分の後を追って來る鶯鶯を夢見る一幕が夢の世界の描寫である。次は、張生がその夢から醒め、現實に引き戻される場面である。

〔未鶯鶯云〕呀、原來卻是夢裏。且將門兒推開看。只見一天露氣、滿地霜華、曉星初上、殘月猶明。『無端燕鵲高枝上、一枕鶯鶯夢不成。』……

〔得勝令〕鶯鶯我的是顛魂魂竹影走龍蛇、虛飄飄莊周夢蝴蝶、絮叨叨促絳兒無休歇、韻悠悠砧聲兒不斷絕。痛煞煞傷別、急煎煎好夢兒應難捨、冷清清的咨嗟、嬌滴滴玉人兒何處也？

周知の如く、關漢卿の續作とされる西廂記第五本では、このあと見事科擧に及第した張君瑞が、晴れて鶯鶯と夫婦になるという團圓に導くのであるが、王實甫原作の西廂記がこの夢から醒める場面で終ることとは、甚だ示唆に富む餘情あふれる幕切れである。この構成の持つ妙味について、従來の論者も次の様に指摘する。

且西廂之妙、正在於草橋一夢。似假疑眞、乍離乍合、情盡而意無窮。何必金榜題名、洞房花燭而後乃愉快也？

（明・徐復祚「曲論」）

ここで徐復祚は、「假の似く眞の如く、乍ち離れ乍ち合ひ、情盡きて意窮まり無き」王實甫原作の西廂記こそ絶妙の作品であるとして稱讚する一方、張君瑞が科擧に及第し、二人がめでたく華燭の典をあげる關漢卿の續作などは問題にならないとしている。

また、『梨園碩人増改定本西廂記』も、次の二箇所にわたって、西廂記の夢についての解釋があり、注者はそこに「色即是空」の意味あいを認めようとしている。

王實甫著西廂、至草橋驚夢而止、其旨微矣。蓋从前迷戀、皆其心

未醒處、是夢中也。逮至覺而曰、「嬌滴、玉人何處也？」則大夢一夕喚醒、空是色而色是空、天下事皆如此矣。關漢卿紐于俗套、必欲終以畫錦完聚、則王醒而關猶夢。

「西廂記評」

西廂原非實事、通一部是個夢境。王實甫作此而以夢結之、蓋令人悟色空之意也。設意甚妙。關漢卿扭於常套、必欲以榮歸爲美、不免太泥。且後所續數摺、才華俱不逮前。

「野宿驚夢」頭注

即ち、王實甫の西廂記は、第四本第四折、草橋驚夢（野宿驚夢）の場面で擱筆したことによって、天下萬事一切が色即是空である道理を悟らせるというのである。榮蕙碩人は姓名を詳らかにしないが、西廂記の夢を色即是空の觀點から解しようとした點が注目される。

さて、この西廂記に描かれた夢は、その現實との對比について考えてみると、専ら作品中の現實世界に屬する一方的な夢であると言える。すなわち、張君瑞は旅途の宿所において、蒲救寺に残して來た驚鶯が自分の後を追って來る夢を見るのであるが、この夢は現實の張君瑞が一方的に夢見るのであって、夢の中の驚鶯から現實の張君瑞に働きかけることは無い。一旦夢から醒めると、そこには晩秋の郊外の荒涼たる現實の風景が広がっているのであり、張生も讀者も、たちどころに現實世界にひきもどされるのである。この夢の場合、あくまでも現實に即して描かれており、夢の世界と作品中の現實とは何ら有機的な關わりを持たない。ここでは、張君瑞の夢が、彼の驚鶯を思う鍾情の象徴として描かれているが、夢の世界の出來事が現實に或る効用をもたらすことはほとんど無いのである。このような、夢の世界と現實世界を截然と區別する夢の設定は、從來の最もポピュラーな夢のパターンであったと言える。

ここで、參考までに、西廂記の藍本である元稹の驚鶯傳、或いは董

解元の西廂記における夢の描寫について検討しておくことにする。まず、元稹の驚鶯傳では、張生の性急な求愛を一度は、いへも無くはねつけた驚鶯が、その後、己の行爲に逡巡した學句、遂に意を決して自ら張生のもとへ忍んでやって來る。その場面では、次の様に、夢の語が用いられる。

數夕、張生臨軒獨寢、忽有人覺之。驚駭而起、則紅娘斂衾攜枕而至、撫張曰：「至矣、至矣！睡何爲哉！」並枕重衾而去、張生拭目危坐久之、猶疑夢寐。……俄而紅娘捧崔氏而至。……有頃、寺鐘鳴、天將曉。紅娘促去。……張生辨色而興、自疑曰：「豈其夢邪？」

この驚鶯傳における描寫は、夢の語を用いて張生の夢みる情況を描いてはいるものの、實は夢でも何でも無い現實そのものである。作者は、遂に驚鶯と情を交すことのできた張生の夢見る様な心地を「猶疑夢寐」「豈其夢邪」と表現したのであって、これは夢の世界そのものの描寫ではない。作者の元稹には、他に、「感夢」「江陵三夢」「夢遊春七十韻」などの夢を扱った作品があり、夢の特徵的な表現について既に注目されているが、こと驚鶯傳に關する限り、夢が特別な世界を持つて具體的に表現されているとは言い難い。續いて、この驚鶯傳を襲った董解元の西廂記では、この他に、特徴的な夢の描寫が二度ある。

生啓門觀、喜不自勝。是誰？是誰？……乃驚鶯也。……生擁鶯至寢。……

〔尾〕瑤瑤的聽一聲蕭寺擊疎鐘、玉人又不見方知是夢。愁濃、楚臺雲雨去無踪。

疎鐘敲破合歡夢、曉角吹成無盡愁。

（卷五）

これは、鶯鶯に手ひどくたしなめられて意氣消沈する張君瑞が、一人宿舎で悶悶とするところへ、鶯鶯が訪ねて来る夢を見る場面である。やがてその夢は、お寺の曉方の鐘によって破られることになる。

この夢は、一途に鶯鶯を思いつめる張生の夢枕に現れた一過性の夢であつて、張生の鍾情を象徴するが、夢の世界から張生の現實世界に働きかけることは無い。その意味で、この巻五の夢もまた、専ら作品中の現實世界に屬する夢であると言ふことができる。

熟視之、乃鶯、紅也。生驚問曰：『爾何至此？』……生携鶯手歸寢。未及解衣、聞羣犬吠門。……

〔尾〕柴門兒脚到處早踉開、這君瑞有心拚揣、向臥榻上撒然覺來。

無端怪鶯高枝噪、一枕鶯鶯夢不成。……

（卷六）

ここでは、旅の宿で眠る張君瑞が、自分の後を追つて来る鶯鶯の夢を見る。この部分は、王實甫の西廂記にも繼承される有名な夢の場面である。或いは、王實甫西廂記においては、先にあげた董解元西廂記巻五の場面と夢の描寫が重出するのを嫌い、この部分のみを繼承したものか。この部分の夢の描寫もまた、前出の巻五の場合と基本的には同様である。一途に鶯鶯を思いつめる張君瑞の夢の中に鶯鶯が現れて来るのであり、張君瑞が夢から醒めれば依然として變わらぬ現實世界に引き戻される。夢の世界と作品の現實世界とは相變らず没交渉である。張君瑞が鶯鶯の夢を見たことは、彼の思いの深さを示すが、張君瑞のその後の現實行動に何の具體的影響も與えていない。従つて、この夢もまた、専ら現實世界に屬する夢であると言へる。

五

次に、明の湯顯祖の還魂記では、その第十齣鶯夢に、次の様に大膽な夢の描寫がある。

身子困乏了、且自隱几而眠。（睡介）〔夢生介〕〔生持柳枝上〕……

……小生順路而來、跟着杜小姐回來、怎生不見？〔回看介〕呀？小姐、小姐。……小姐、和你那答兒講話去。（且作含羞不行）〔生作

牽衣介〕〔且低問介〕那邊去？……〔且作羞〕〔生前抱〕〔且推介〕

……〔生強抱且下〕

即ち、この場面において、夢見がちな少女杜麗娘は、ある時、夢で牡丹亭に遊び、そこで初めて柳夢梅と甘美な契りを結ぶ。そして、夢から醒めてもそのことが忘れられなくなった杜麗娘は、第十二齣尋夢において、再びその夢のあとを尋ねてみる。やがて、その夢がもとで重い戀思いに罹った杜麗娘は、自らの麗しき十六歳の繪姿をこの世に書き残し、その遺體を庭の梅樹の下に埋めてくれる様に遺言して、果敢無くこの世を去るのである。その墓には、やがて當の柳夢梅が訪れて繪姿を發見し、また冥途で閻羅王の審判を受けた杜麗娘も、柳夢梅との宿縁に従つてこの世に蘇生する。その後、幾多の曲折を経て、柳夢梅は狀元に及第し、二人は晴れて夫婦となり、物語は大團圓を迎える。（この他、還魂記では、第二齣言饑、柳夢梅が夢で美人を夢見て是非會いたいと念願する場面、及び第一八齣幽媾、柳夢梅が夢で杜麗娘の靈魂と出會う場面等に夢の描寫が効果的に用いられている。）

してみれば、還魂記においては、杜麗娘が夢で柳夢梅と初めて契つたことが、彼女のその後の全ての行動を規制し、且つ支配していることになる。事實、この甘美な夢の世界の出來事は、あたかも名曲のテ

「マ」の様に、杜麗娘の記憶の中で繰り返し回憶再生される。そして、それは、杜麗娘と柳夢梅がやがて結局は現實世界において結ばれるというのを讀者に豫想させる効果を持つ、還魂記中の主要場面となっているのである。この様に、夢の世界の出來事が逆に作品の現實世界に働きかけ、夢見る當事者の行動を強く支配するということは、從來の文學作品における夢の設定には見られなかつた斬新な發想であり、還魂記の夢の描寫をいっそう際立たせる新機軸であると言える。

このことについて、既に岡晴夫、岩城秀夫兩氏にも次の様な指摘があり、還魂記における夢の設定の新しさについて注目している。

〈夢〉は多くの戯曲作家にとっては、單にパターンとしてしか意識されなかつたように思われる。これを文學的モチーフとして、意識的に戯曲の中に取り入れて成功したのが、「還魂記」であつた。

（岡晴夫「元曲・明曲における〈夢〉」）

「還魂記」の場合は、夢の中の設定が、次第に現實と重なり、現實の世界において實現してゆくのであつて、興味はその實現の仕方に向けられてゆく。……柳夢梅と杜麗娘の歡會は、まず夢の中の事件として容認され、のちにこれが現實の世界に密接につながるごととして、興味と關心を惹き、現實の世界で二人が結ばれるよう、終局に導かれることになつてゐる。（岩城秀夫「中國戯曲演劇研究」）

さて、湯顯祖の牡丹亭還魂記は、特徴的な四つの夢物語劇として知られる玉茗堂四夢（臨川四夢）の一であるが、他の三夢の紫釵記・南柯記・邯鄲記の三作品においては、如上に述べた様な夢の描寫の現實との關わりについては如何であらうか。岩城氏の前掲書にも三作品の構成について詳細に紹介するが、紫釵記は李益と霍小玉の愛情物語を

描き、南柯記は淳于棼の夢物語を、また邯鄲記は盧生邯鄲の夢を描く。これらは、いずれも唐代傳奇小説として知られる蔣防の霍小玉傳、李公佐の南柯太守傳、及び沈既濟の枕中記に取材しており、それぞれ夢の描寫に特徴がある。

蔣防の霍小玉傳では、小玉との結婚の約束を反故にして長安に隠れ住む薄情な李益が、ある日黄衫の丈夫に連れられて小玉の面前に姿を現わす。このことを、實はその前夜に、瀕死の病床にある小玉が次の様な夢を見て豫知するのである。

先此一夕、玉夢黃衫丈夫抱生來、至席、使玉脫鞋。驚寤而告母。……凌晨、請母梳粧。……粧梳纔畢、而生果至。

この夢は、寢れ果てた小玉の臨終の夢である。それは結局は正夢として、李益に會うという豫言が的中することになるが、作品中では専ら小玉の現實から發する一方的な夢であり、夢の世界から主體的に現實に關わつてくることは無い。

また、これに基づく湯顯祖の紫釵記では、第二七齣女俠輕財に、任地にいる夫の李益を妻の小玉が夢見る場面がある。第四九齣曉窗圓夢は霍小玉傳の夢の描寫を襲い、李益の出現を小玉が夢見る。更に第五二齣劍合圓圓にも、小玉が李益の到來を待ちわびて夢を見る場面がある。してみると、紫釵記の夢の設定は、概ね霍小玉傳を襲用し、相手を中心に思いつめて夢を見るパターンであることがわかる。これは、基本的には唐代傳奇小説によく見られる夢の設定そのままである。

次に、李公佐の南柯太守傳は、淳于棼が大醉して寢込む間に、夢で蟻の國槐安國へ行って出世する話である。作品の現實世界と夢の槐安國とは別個の世界として描かれており、その間を繋ぐものは淳于棼の夢である。しかし、この夢は一たび醒めればそこで完了し、現實世界

とは何ら有機的な關連を持たない。これに取材した湯顯祖の南柯記では、南柯太守傳を敷衍して、第十齣就徵に淳于棼が夢見る場面があり、以後も現實世界と夢の槐安國とが交錯して描かれているが、夢の設定については、基本的には南柯太守傳と同様である。

更に、沈既濟の枕中記、及びこれに取材した湯顯祖の邯鄲記では、盧生邯鄲の夢を敷衍して描くが、その夢の設定は、やはり基本的には主人公の側からのみ一方的に發する一過性の夢であり、夢から醒めれば以前と同じく現實に戻ることは、南柯太守傳、南柯記と同様である。これらの夢は、いずれも虚しく醒めた後に、人生の榮華の虚しさを悟るといふ教訓を残すが、夢の世界と現實とは截然と分離しており、その間に有機的な關連は認められない。

以上に述べた臨川四夢の夢のあり方からも、特に還魂記においては、夢の世界の出來事が主役のその後の現實の行動を終始支配するという點で、獨り抜き出た甚だ斬新な發想があり、讀者に新鮮な印象を與えるのに十分なものであったことがわかる。

六

次に紅樓夢の場合、夢の設定は小説全體の構造と深く關わり、小説を構成する最も重要な要素として、更に大膽且つ強烈に描かれる。即ち、その第五回、夢で仙境に遊んだ賈寶玉は、そこで天宮を司る警幻仙姑から金陵十二釵圖や紅樓夢曲を教わるが、これは次にあげる様に、紅樓夢に登場するヒロインの運命を豫言したものとなっており、實はその後に展開される紅樓夢全體の構想が、既にここに巧妙に解き明かされているのである。

晴雯 畫：又非人物、也無山水……詞：霽月難逢、彩雲易散……

襲人 畫：一簇鮮花、一牀破席。詞：枉自溫柔和睦、空云似桂如蘭。

香菱 畫：一株桂花、下面有一池沼……詞：根並荷花一莖香、平生遭際實堪傷……

林黛玉 畫：薛寶釵 畫：兩株枯木、木上懸着一團玉帶、又有一堆雪……詞……玉帶林中掛、金釵雪裏埋。

賈元春 畫：一張弓、弓上掛一香櫺。詞：二十年來辨是非、榴花開處照宮闈……

賈探春 畫：兩人放風箏、一片大海、一隻大船……詞：才自精明志自高、生於末世運偏消。

史湘雲 畫：幾縷飛雲、一灣逝水。詞：富貴又何爲、襁褓之間父母違……

妙玉 畫：一塊美玉、落在泥垢之中。詞：欲潔何曾潔、云空未必空……

賈迎春 畫：一惡狼、追撲一美女……詞：子係中山狼、得志便猖狂……

賈惜春 畫：一座古廟、裏面有一美人在內獨坐看經。詞：勘破三春景不長、緇衣頓改昔年妝……

王熙鳳 畫：一片冰山、山上有一隻雌鳳。詞：凡鳥偏從末世來、都知愛慕此生才……

賈巧姐 畫：一座荒村野店。有一美人在那裏紡績。詞……偶因濟劉氏、巧得遇恩人。

李紈 畫：一盆茂蘭、旁有一位鳳冠霞帔的美人。詞：桃李春風結子完、到頭誰似一盆蘭……

秦可卿 畫：高樓大廈、有一美人懸梁自縊。詞：情天情海幻情身……

情既相逢必主淫。……

紅樓夢曲

第一支 引子

第二支 終身誤……賈寶玉

第三支 枉凝眉……林黛玉・薛寶釵

第四支 恨無常……賈元春

第五支 分骨肉……賈探春

第六支 樂中悲……史湘雲

第七支 世難容……妙玉

第八支 喜冤家……賈迎春

第九支 虛花悟……賈惜春

第十支 聰明累……王熙鳳

第十一支 留餘慶……賈巧姐

第十二支 晚韶華……李執

第十三支 好事終……秦可卿

第十四支 飛鳥各投林

この他、第十三回に、秦可卿が死んで王熙鳳の夢枕に立ち、賈家の將來について様々な忠告と豫言をする場面、第五回に、夢で仙境に遊んだ賈寶玉に向つて、警幻仙姑が意淫の語で以て賈寶玉を評する場面、第一回並びに第五回に、甄士隱や、賈寶玉が夢で天界に遊び、
「假作真時真亦假、無爲有處有還無」と書かれた對聯を發見する場面など、紅樓夢における眞實は、全て夢幻の世界に假託して語られていくことが、紅樓夢における夢の構想の際立った特徴である。更に、冒頭第一回、甄士隱が夢で天界に遊んだ場面において語られる様に、紅樓夢は、女媧補天の際に残つた天界の靈石が、ふとしたことで凡心を

起こし、賈寶玉の口に衒まれて凡俗界に轉生し、あたかも精巧なビデオカメラの如く、この世で見聞したことを記録した石物語という設定になっている。この様な設定からすれば、紅樓夢は、文字通り小説全體が一篇の夢物語であることになる。

このように、紅樓夢では、作品における現實世界をして盡く夢幻のものであると設定し、この夢の世界の立場に立つて、逆に作品の現實世界が語られる。この様な紅樓夢における夢の構想は、還魂記において、夢の世界の出來事が作品展開の重要な關鍵であつた設定を更に一步踏み越え、夢の世界を際立つて突出させた曹雪芹の新しい發想と言へるのではあるまいか。このことを、夢に蝶となり、遂に彼(夢)と我(現實)の區別を忘れた有名な莊周の故事に例えるならば、從來の作品における夢の描寫は、あたかも現實の莊周が夢で蝴蝶となつたのに對し、紅樓夢の場合は、これを反轉して更に一步を進め、逆に夢の中の蝴蝶が假に莊周の姿をして現實世界に現れたが如くである。

なお、高鶚續作の紅樓夢後四十回は、前八十回にうまく辻褄を合せて物語を展開させ、完結させているが、そこに現れた夢の設定から見た場合、前八十回のように典型的な夢の特徴は無く、賈寶玉を單なる現實世界の俗人として描いている様に見受けられる。いまその中の幾つかの例をあげると、まず第八二回では、林黛玉が賈寶玉の惡夢を見る。この場面は二人の木石縁の破綻を想像させるとは言え、夢の設定そのものは林黛玉の側からのみ發する一方的な現實世界の夢である。次に第九七回の替玉結婚の場では、結婚の相手を林黛玉と思ひ込んだ賈寶玉が、式の當日に意外にも薛寶釵を眼前にし、「自己反以爲是夢中了」「我是在那裏呢?這不是做夢麼?」と自問する場面があるが、これは實は夢の世界とは關わりない現實世界の描寫である。ここで、

襲人が夢中忘我の状態にある賈寶玉に向つて、「你今日好日子、什麼夢不夢的混說」と諫めるのは、後四十回における賈寶玉の現實描寫として甚だ象徴的である。續いて第九八回では、新妻薛寶釵から林黛玉の死を告げられた賈寶玉が一場の悪夢を見る。ここには閻魔廳の世界が描かれるが、夢の描寫はやはり一過性のものであり、醒めればぐっしょり寝汗をかき、脈搏も正常に戻った現實の賈寶玉が依然として在るのである。更に第一〇九回には、死去した林黛玉への思い斷ちがたい賈寶玉が、何とかその夢を見ようと苦心して遂に失敗する場面がある。「若説林姑娘の魂靈兒還在園裏、我們也算好的、怎麼不曾夢見了一次。」「寶玉醒來、拭眼坐起來想了一回、並無有夢、便嘆口氣道：『正是悠悠生死別經年、魂魄不曾來入夢！』」高鶚はここで、亡き楊貴妃の夢見に失敗した玄宗の故事を描いた白居易の「長恨歌」を引用して、賈寶玉の嘆きを描寫する。賈寶玉が遂に林黛玉の夢見に失敗するこの一段も、専ら現實世界に屬する賈寶玉の描寫として甚だ象徴的である。最後に第一一六回では、寶玉を失くして呆けている賈寶玉の靈魂が天上世界をさまよう様子が、夢の世界の出來事として描かれる。私の本論の考察としては興味を惹かれる夢の世界の設定であるが、實はこれは曹雪芹原作の第五回、賈寶玉が夢で天宮に遊び、警幻仙姑から紅樓夢のからくりを知らされる部分を承けたままでのことであり、高鶚の獨自の發想と云うことはできない。

以上あげた諸例から、高鶚續作の紅樓後四十回においては、賈寶玉は、もっぱら高鶚自身を恐らくは反映した現實世界の人として描かれ、その夢の描寫も現實そのものに屬し、曹雪芹原作の前八十回に見られる様な、夢の世界から逆に現實の世界が語られる獨自の發想は皆無であることが明らかである。

七

以上、紅樓夢に大きな影響を與えた西廂記、還魂記から紅樓夢に至る作品における夢の設定について、夢と現實の交錯という観点から比較検討した結果、そこには、いわば現實の中の夢から夢の中の現實へという夢の構想の發展過程を見て取ることが可能である様に私には思われる。

それでは、更に、この様な夢の構想の發展の意味するものは何であるるか。言い代えれば、西廂記、還魂記、紅樓夢の作者は、何故にこのような夢の設定をそれぞれの作品中に採り入れたのであろうか。

この疑問について考えてみると、ここに、夢の素材と共に三作品に共通するテーマとして、情の問題が大きく浮び上つて來る。この情についても、夢と同様、從來様々に文學作品に登場し、様々に論じられている。あたかも紅樓夢第一一一回にも、情について次の様に定義する。

不知情之一字、喜怒哀樂未發之時便是個性、喜怒哀樂已發便是情了。至於你我這個情正是未發之情、就如那花的含苞一樣、欲待發洩出來這情就不爲真情了。

しかし、言葉の穿鑿は本稿の意圖するところでは無いので、ここでは、所謂情について、現象としての男女間の戀愛感情という程度に解しておくことにする。即ち、西廂記は崔鶯鶯と張君瑞の、還魂記は杜麗娘と柳夢梅の、紅樓夢は林黛玉と賈寶玉の戀愛感情について描くことが三作品共通の主題であり、作者はそのためにこそ夢の描寫を驅使しているのである。

西廂記では、第四本第四折、科學に赴く途中の張生が、自分の後を

追って来る鶯鶯の夢を見る場面で見切れるが、この構成の意味するところは重大である。すなわち、この構成からは、苦勞してやっと結ばれた鶯鶯と張生の情愛さえも、所詮は果敢なき一場の夢であったと解釋し得る。前述の槃適碩人がここに色即是空の意味合いを認める所以である。西廂記のこの部分の夢の描寫は、張生の鶯鶯に對する情の深さを表わすと同時に、それがすぐ醒めてしまうものであるという教訓を含んでいる様に思われる。つまり、ここでは、夢の描寫からんで情の主題が描出されているのである。ただ、その情の持つ教訓性は、ここでは夢の描寫に伴ってその様に解釋し得るといふ可能性のものであり、作品中の現實は、あくまでも旅の宿に眠る張生が愛しい鶯鶯の夢を見たということでは無い。その意味で、西廂記の情は、夢と同様にひたすら現實的である。

次に還魂記の場合、杜麗娘と柳夢梅の情愛の純粹さを表わすのに夢の場面が意圖的且つ効果的に用いられる。即ち、第十齣驚夢において、杜麗娘は夢の中で見知らぬ若い青年柳夢梅と初めて契りを結ぶのであるが、この場面は、夢の世界であればこそ純粹且つ強烈な印象を與えるのである。もし作品の現實世界の描寫であれば、二人の野合は不道德のそしりを免れないであろう。また、第十六齣詭病に、杜麗娘の病因を夢のせいだとして周圍が納得するのも、夢なればこそであり、第三五齣回生に、死んだはずの杜麗娘が生き歸るのも、夢の世界であればこそ、逆に現實感を以て讀者觀客に訴えるのである。還魂記のその他の場面でも、第二齣言懷、第二八齣幽幃などに夢の描寫が用いられるが、これらは全て先の杜麗娘が夢の中で柳夢梅と契る場面に收斂していくものと考えられる。つまり、還魂記においては、杜麗娘と柳夢梅との情愛を描くのに、夢の世界を中心にして實に巧妙に物語

が展開されているのである。

この様に考えて來ると、湯顯祖が還魂記の題詞において、次の様に夢と情とを不離一體のものとして統括的に述べていることは、作者自身の發言として甚だ重要であり、注目に値するものである。

天下女子有情、寧有如杜麗娘者乎！ 夢其人即病、病即癱連、至手畫形容、傳於世而後死。死三年矣、復能冥莫中求得其所夢者而生。如麗娘者、乃可謂之有情人耳。情不知所起、一往而深。生者可以死、死可以生。生而不可與死、死而不可復生者、皆非情之至也。夢中之情、何必非真？ 天下豈少夢中之人耶！

八

最後に、紅樓夢の場合、夢の世界の意味するものは、情との關係において、更に強烈であり、且つ全面的である。即ちその第五回、夢で天界に遊んだ賈寶玉は、警幻仙姑から次の様に情の人である自分の本質を知らされるが、これは紅樓夢の主題に深く關わる重要な設定である。

吾所愛汝者、乃天下古今第一淫人也。……如爾、則天分中生成一段癡情、吾輩推之爲「意淫」。

その他、紅樓夢においては、林黛玉以下數多の女性が登場し、賈寶玉をめぐって物語が進行するが、これらは全て夢物語という設定である。従って、第二三回、賈寶玉と林黛玉の會話に西廂記が多用され、また還魂記も引用して二人の情愛が高まる場面を含め、紅樓夢の情を描いた多くの場面は、全て夢物語つまり假話であるということになる。

この様に、紅樓夢では、作品中の現實の情愛の世界さえも、實は夢

(假)の世界であるという主張の下に物語が展開される。この斬新で強烈な發想は、従來の作品には見られなかったものであり、紅樓夢の持つ大きな魅力の一である。

以上の考察から、西廂記、還魂記と紅樓夢においては、情のテーマについても、先に述べた夢の設定とびつたり表裏一體となつて、いわば現實に發した情から情の中の現實へと發展し、昇華してゆく道筋を明らかにすることが出来る様に思う。

曹雪芹が紅樓夢前八十回を執筆した時、その表現の類似性、引用襲用の仕方から見ると、先行作品として王實甫の西廂記、湯顯祖の還魂記を意識裡においていたことは確かである。そこに描かれた夢や情についても、これらの先行作品から何がしかのヒントを得たであろうことが十分に想像される。あたかも子供が常に親をヒントにして大きく成長してゆくが如くである。

中國文學において夢や情を扱う作品は數多くあるが、その中で、紅樓夢に大きな影響を与えた先行作品としての西廂記、還魂記について、夢の描寫の現實との關わりという觀點から見ると、上述の如き現實の中の夢(情)から夢(情)の中の現實へと、この發展關係を讀み取ることが可能なものではあるまいか。

註(1) 『紅樓夢卷』卷三所收。

(2) 『紅樓夢卷』卷二所收。

(3) 『紅樓夢卷』卷二所收。

(4) 『紅樓夢卷』卷三所收。

(5) 『紅樓夢卷』卷二所收。なお孔祥賢「紅樓夢題名探源」(『紅樓夢研究』

J21 人民大學 一九八一)も更に多くの資料に言及する。

(6) 太平書局、一九六三年。

(7) 定本は俞平伯校訂『紅樓夢八十回校本』(中華書局 一九七四年版)、王季思校注『西廂記』(上海古籍出版社 一九七八年版)、『湯顯祖集』(上海人民出版社 一九七三年)をそれぞれ使用した。ここにあげた事例の多くは、既に伊藤漱平譯注『紅樓夢』(平凡社 中國古典文學大系 四四、四五、四六)が指摘するが、新たに加えたものもある。

なお、②奈何天、④出落得(的)の常套語表現には、直接の影響を認め難い點もあるが、参考までにあげた。

(8) 汪辟疆校録『唐人小説』(上海古籍出版社 一九七八年版)所收。

(9) 『中國古典戲曲論著集成』(中國戲劇出版社 一九五九年版)所收。

(10) 一九六三年中華書局影印本。また一九八二年廣文書局本。

(11) 汪辟疆校録『唐人小説』所收。

(12) 參考論文に高橋美千子「元稹の夢についての考察」(中國文學報第三二冊 一九八〇年 京都大學)がある。

(13) 人民文學出版社、一九六二年版。

(14) 還魂記第三齣訓女に、杜麗娘を睡、眠を好む少女としたり、第十齣驚夢に、牡丹亭を散歩して疲れた杜麗娘が眠り、込むのは、夢の世界での杜麗娘と柳夢梅の情交というこの作品のテーマに直結する作者の配慮であると思われる。

(15) 『藝文研究』三二、一九六七年。

(16) 第三章還魂記。創文社、昭和四八年。

(17) 汪辟疆校録『唐人小説』所收。

(18) 伊藤譯注『紅樓夢』及び蔡義江『紅樓夢詩詞曲賦評注』参照。

(19) ここで、夢に關連して、紅樓夢における眞假の問題について更に贅言しておきたい。冒頭第一回に「作者自云、因曾歷過一番夢幻之後、故將眞事隱去、而借通靈之說、撰此石頭記一書也。……又何妨用假語村言敷演出一段故事來、以悅人之耳目哉。故曰賈雨村云云。」とある。この記

述から、紅樓夢において、假語、村言によって敷衍された現實世界の裏に巧妙に隠された眞事、の存在を窺ひ知る。事實、紅樓夢には、物語の口上人たる甄士隱——賈雨村をはじめ、主人公の賈寶玉——甄寶玉、家族の賈家——甄家、舞臺の太虚幻境——大觀園など、真假の對比構成が隨處に顯著であり、夢も作品の現實世界に對比される。幻境の對聯に「假作眞時眞亦假」（第一、五回）とあることも考え合せると、紅樓夢では、現實は全て夢幻であり、夢幻こそが眞實である。つまり、夢の世界の描寫の中に眞實が隠されていることを意味する。とすれば、紅樓夢に隠された眞事を探らうとすれば、その夢の描寫を追ってゆけばよいという單純な圖式が成り立つ。（むろん、圖式はそうであっても、實際はもっと複雑である。例えば、第一回と第五回の作者が異なるという説が太田辰夫氏「紅樓夢新探一・Ⅱ」（神戸外大論叢一六—三・四 昭和四〇年）にある。しかし、この問題を更に進展させる見識は今の私に無い。）この觀點からすれば、夢の世界の中に太虚幻境を描く第一回、第五回は特に重要である。即ち第一回、絳珠草（林黛玉）の神瑛侍者（賈寶玉）に對する還淚説話は、作者の秘められた眞事ではなからうか。絳珠つまり紅豆（相思子）の連想からすれば、作者の林黛玉と覺しき女性との悲戀の反映であろう。同様に、第五回の意淫は、苦悶した作者の到達した境界であったと思われる。また、第五回に賈寶玉が夢で幻境に遊ぶ場面に登場する金陵十二釵高冊、紅樓夢曲には、その後展開する紅樓夢の眞事が隠されている。更に第五回、王熙鳳の夢枕に立つ秦可卿の遺言は、賈家の將來を暗示して異様にリアルである。

こう考えてくれば、紅樓夢において賈（假）寶玉の合せ鏡の様に登場する甄（眞）寶玉こそは、まことに作者の眞の分身であらうと推察される。即ち、第二回では、賈雨村の口上の中にフェミニスト甄寶玉が登場し、第十六回では、その甄家が天子の行幸を四度まで迎えたという（康熙帝の南巡を指す）。また第五十六回では、甄寶玉と賈寶玉が夢の中で

西廂記、還魂記と紅樓夢をめぐる夢の發展

對面し、第七十五回には、甄家の抄没の報が傳えられる（曹家の凋落を言う）。むろん賈寶玉も作者の一化身であらうが、更に反轉して、この部分の甄家及び甄寶玉の描寫こそ、曹家及び曹雪芹の隠された眞事に深く關わるものであったと考えられるのである。なお、この問題に關する專論として、伊藤漱平「紅樓夢」に於ける甄（眞）・賈（假）の問題、「同續」（中哲文學會報第四號・第六號 昭和五四年・五六年）がある。「湯顯祖にはこの他に「因情成夢、因夢成戲」の語があり、湯顯祖における情と夢と戯曲の關係を見る上で注目される（湯顯祖集 詩文集卷四七 玉茗堂尺牘之四）。また、湯顯祖が情を詠んだ七絶詩「江中見月懷連公」に

無情無盡恰情多 情到無多得盡麼
解到多情盡處 月中無樹影無波

とある（湯顯祖集 詩文集卷一四 玉茗堂詩之九）。この七絶詩は、紅樓夢第三二回開始總批に、次の説明を付して引用される。（諸本の字句の異同は俞平伯『脂硯齋紅樓夢輯評』を参照）

前明顯祖湯先生有懷人詩一畝、讀之堪合此回、故錄之以待知音。以て、紅樓夢の作者曹雪芹に與えた還魂記の作者湯顯祖の情の影響の深さを知る。

（附記）拙論に關わる紅樓夢關係論文について、伊藤漱平先生の御示教を得ることができた。心から感謝申し上げる。